

Questionnaireにおける“?”反応の 選択要因について(I)

—— Y - G 性格検査による検討 ——

岩渕 次郎 熊井 桂子

目録形式による性格検査は、対象を理解するために必要な多くの情報を系統的かつ容易に収集する有力な手段の1つとして発展しつつあるが、他方そこでの被検者の反応選択行動は必ずしも安定したものではなく、質問項目の属性・被検者の個人特性・検査状況等の諸条件からさまざまな影響を受けて変動しがちであり、ときには被検者の実像とかけ離れた反応選択さえもなされることが知られている。

たとえば、刺戟(質問項目)に付随する各種の曖昧さ(ambiguity)に関する研究からは、難解な表現・刺戟の多義性・条件設定の不十分な記述などが、回避的反応(無回答・?反応・不定反応)や刺戟内容と遊離した stereotyped な反応を誘発し、測定結果に歪みをもたらすことが指摘されている。

また被検者の個人特性の影響については、おもに検査に対する被検者独自の反応の構え(response set)または反応スタイル(response style)を中心に検討されており、そこでは質問内容の如何に拘らず肯定的反応を示す傾向(acquiescence, agreement tendency)・社会的望ましき(social desirability)の規準に基づく反応傾向・多くの選択肢から極端な反応を選ぶ傾向(extremity of response)などが、検査結果の妥当性を損なうものとして注目されてきた。そしてこれらの傾向が、刺戟(質問項目)の属性よりも被検者の個人特性に、より依存していることが明らかになるにつれ、それらに対する研究の関心は、検査におよぼす歪曲効果(bias effect)そのものよりも、パーソナリティ特性との関連性へと向っているように思われる。

肯定的反応傾向を被検者の人格・興味・個人的反応スタイルの顕われ(manifestation)とする見方は、すでに Berdie (1943) に遡ってみられ、その後 Jackson & Messick (1958), Couch & Keniston (1960) などが、これらを人格の1変数とみて検討を深めている。

このなかで Couch & Keniston は、「反応の構えは深層に内在する人格症候群(personality syndrome)の顕われであり、肯定的反応傾向はその症候群の決定要因によって説明できる」との仮説の下に、この反応の構えについて客観テストと臨床的評定プロ

グラムとから分析を試みている。そしてそのなかで、肯定反応多発者 (yeasayer) には、自我統制が弱く、衝動を留保できぬままに受け容れ易く、かつ周りからの刺激に対して反応し易いなどの傾向を、また一方否定反応多発者 (naysayer) では、衝動を禁止 (または抑制) し、周りからのあらゆる情緒的刺激をさまざまな方法で拒否し易いことを見出し、さらに発達史的観点から、この差異を彼らの初期の社会化の過程に求めて理解しようとしている。

ところで目録形式の性格検査のなかには、三件法 (“はい”・“いいえ”・“?”または“どちらでもない”) によるものが少なくない (MMPI・MPI・Y-G・CAS など) が、臨床場面においては、しばしば “?” (“どちらでもない” を含む) 反応の著しく目立つプロトコルに出会ってその解釈を留保したり (一般に検査結果の妥当性は “?” 反応の頻度に応じて低減する)、このような反応選択過程そのものの了解にも苦しんだりすることが珍らしくない。

しかし検査者を当惑させるこの “?” 反応も、それ自体 “はい” や “いいえ” と並んで被検者の表現形式のひとつであるという点において、その意味は十分に検討される必要がある。これに関するこれまでの研究では、続 (1954) が “?” 反応と質問項目の多義性との関連を指摘しており、Edwards & Walsh (1963) も各質問項目にみられた “?” 反応量が、項目の曖昧さの1規準とみなし得ることを示唆するとともに、17種の検査資料をもとに “?” 反応に関する因子分析を行ない、反応に対する回避的傾向を意味すると思われる因子を抽出している (1964)。また Eysenck (1962) は、MPI 等の検査得点に関する因子分析を通して “?” 反応個有の因子を見出し、その意味を被検者の決断性から吟味している。ついで Graham (1977) は、MMPI における “?” (cannot say) 尺度を、被検者の優柔不断・両価感情・自己の否定的な特性を認めることを避けようとする傾向などの指標とみなしている。

これらの研究は、“?” 反応が被検者の性格特性と関連してもたらされるものであり、さらに “?” 反応多発傾向が、さきに触れたさまざまな反応傾向と同様に、それ自体被検者の人格特性として解明されるものであることを示唆しているように思われる。そして “?” 反応多発傾向に対してこのような観点から接近を試みるときには、Couch & Keniston が肯定的 (または否定的) 反応傾向の検討に際してとり入れた前出の仮設が、そのまま援用され得るものと思われる。

本研究はこの仮説を藉りて、「反応の構えは深層に内在する人格症候群の顕われであり、“?” 反応傾向 (cannot say tendency) はその症候群の決定要因によって説明できる」との立場から、いくつかの性格検査によって得られた “?” 反応多発者のパーソナリティ解明に向かおうとするものである。

しかしこれらの作業においては、検査にみられる “?” 反応の統計的把握が前提とさ

れるにも拘らず、現行の多くの検査では“?”反応に関する統計資料を欠いており、その平均的出現頻度さえも不明のままとなっている。このような状況のもとでわれわれは、まず“?”反応に関する基本的統計資料の整備から着手することとし、さし当たりY-G性格検査にみられる“?”の出現状況について、個人の“?”反応傾向の水準に留意しながら考察を加えることとした。

対象と手続き

道内医科大学2学年学生を対象とする心理学実習で、集団施行したY-G性格検査の結果(145人分)を分析した。

個人別の結果の処理は正規の手続きに従ったほか、選択した“?”反応の個数を改めて尺度別・因子別に計上し、その総数とともに分析資料に加えた。

また“?”反応総数を、各人の“?”反応傾向の程度を示す指標とみなし、必要に応じ全員をその相対的な高低によってつぎの3群にはほぼ同数宛分類した。

- ① LQ 群(“?”反応稀少群): “?”総数11点以下の者(53人, “?”平均値4.66)
- ② MQ 群(中等度群): 12~23点(45人, 平均16.96)
- ③ HQ 群(“?”反応多発群): 24~67点(47人, 平均34.66)

結果と討議

Y-Gの尺度別粗点と“?”反応数: 対象者全員(145人)から得られた尺度別の粗点および“?”反応数の各平均値は(表1)に示される。

粗点は、当然ながらいずれも標準点「3」(表1) Y-G尺度別粗点および“?”反応数

の段階に入って、この集団の平均プロフィールが“average type”を描くことを示している。

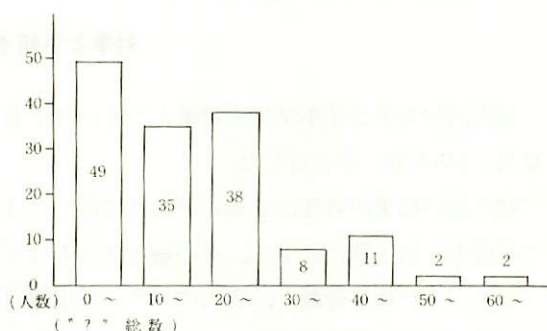
尺度別の“?”反応数は、1.11(D)から2.15(G)まで尺度の間でばらつきがみられ、また12尺度中8尺度までがそのSDは“?”の平均値の2倍を超える。“?”の平均総数は18.20(全項目数の約15%)にのぼり、かつ分散もかなり大きい(14.13)。この“?”の平均総数については、辻岡(1973)が8.7(京大学生200人)を報告しており、われわれの結果とは極めて大きい差がみられるが、その吟味はなお諸家の資料との照合を通し

尺度	粗点平均±SD	“?”数平均±SD
D	10.2 ± 5.5	1.11 ± 1.56
C	8.9 ± 5.1	1.21 ± 1.50
I	7.8 ± 5.0	1.63 ± 1.86
N	10.4 ± 5.0	1.17 ± 1.41
O	8.2 ± 4.4	1.23 ± 1.40
Co	6.6 ± 3.8	1.61 ± 1.52
Ag	10.7 ± 3.8	1.61 ± 1.55
G	10.5 ± 4.6	2.15 ± 1.84
R	10.8 ± 4.7	1.43 ± 1.70
T	8.8 ± 4.3	1.61 ± 1.66
A	9.1 ± 5.3	2.00 ± 1.88
S	12.3 ± 5.1	1.44 ± 1.64
(総数)		18.20 ± 14.13

てなされる必要がある。なお、“?”のSDの高さから、“?”反応の選択に関して個人差の大きいことがうかがわれるが、このことは(図1)のヒストグラムにも示される。ここでは、“?”を全く選ばなかった者(8人)から最大値67(全項目の約56%に当たる)の者まで、個人別の“?”総数にはかなり大きな変動がみられた。

“?”総数と各尺度粗点との関連を
探るために、それぞれの相関を求めたのが(表2)である。これによれば、“?”総数と協調性尺度(Co)の粗点とに正の相関がみられ($r=0.335$, $p<0.01$), “?”総数の多い者ほど非協調的な方向へ寄る傾向がうかがわれた。また主導性因子に含まれる支配性(A)と社会的外向性(S)の両尺度では、“?”総数と負の相関を示し($r=-0.247$, -0.223 いずれも $p<0.01$), “?”総数の多い者ほど服従的かつ社会的な内向性の傾向を持ち易いようにおもわれた。なお、のんき性(R)尺度でも低い負の相関が認められており($r=0.190$, $p<0.05$), これらのことから、“?”総数の増加に伴ないプ

(図1) “?”総数のヒストグラム



(表2) “?”総数と各尺度得点との相関

尺度	r	尺度	r
D	0.006	Ag	-0.046
C	0.077	G	0.010
I	0.095	R	-0.190*
N	-0.063	T	0.019
O	0.126	A	-0.247**
Co	0.335**	S	-0.223**

(* $p<0.05$, ** $p<0.01$)

ロファイルは情緒安定性と社会適応性両因子に属する各尺度で不安定・不適応の方向へ、一方活動性・衝動性・主動性等の因子にかかわる尺度で不活発・消極的方向へと移動する可能性が想定された。

(表3)は、“?”総数の高低によって分けられた3群間で、各尺度の平均粗点を比較

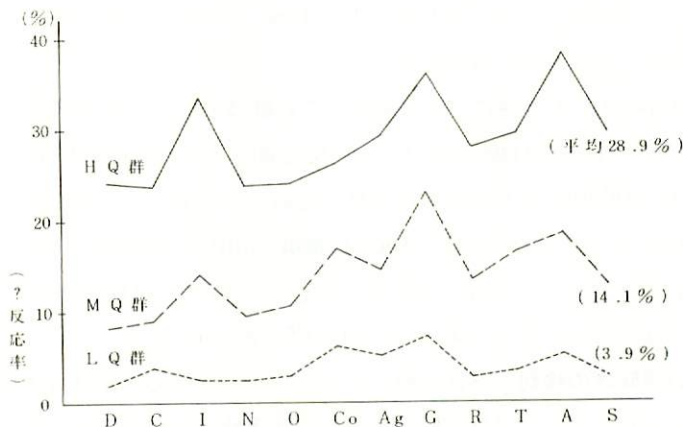
(表3) “?”総数の高低による3群の尺度別粗点

尺度	LQ	MQ	HQ	尺度	LQ	MQ	HQ
D	9.74	10.44	10.60	Ag	10.60	11.51	10.15
C	8.40	9.78	8.68	G	10.77	10.58	10.13
I	7.68	7.53	8.23	R	11.13	11.22	10.15
N	10.28	10.31	10.70	T	9.38	8.53	8.36
O	8.00	8.36	8.21	A	8.96	9.42	9.00
Co	5.96	7.27	6.72	S	12.43	12.49	11.83

したものであるが、数値の配列に上記の印象に沿った傾向がうかがわれるものの、すべての尺度にわたり“?”反応傾向の高さに関して群間差を認めることができなかった。

“?”反応傾向と尺度別“?”反応率：“?”反応傾向の水準を異にするLQ・MQ・HQ各群の尺度別“?”数を比べると(図2)のごとくなる。

(図2) LQ・MQ・HQ各群の尺度別“?”反応率



各尺度ごとに、3群の“?”数に関して適合度の検定を行なった結果、活動性尺度(G)と協調性尺度(Co)において、LQ・MQ両群の“?”反応が期待値よりも明らかに高く($\chi^2=8.580$ および 8.866 , いずれも $df=2$, $p<0.02$), 一方抑うつ性尺度(D)においては、有意ではないがHQ群で“?”反応が期待値より高いこと($\chi^2=5.394$, $df=2$, $p<0.10$) が知られた。

このような、他群と共通の尺度刺激に対してのHQ(“?”多発)群独特の反応特徴は、“?”反応傾向と人格変数との関連を検討する際の手がかりとなり得るが、上でみられた傾向は、なおその解明に足る十分な資料とは言えない。

“?”反応傾向とプロフィルの判定型:LQ・MQ・HQ各群成員の判定型を分類したものが(表4)である。なお被検者全数での判定型では、D(director) type が最も多く(29.0%), ついでA(average) (22.8%)・B(black list) (20.0%)・E(eccentric) (16.6%)となり、最も少ないものはC(calm) type (11.7%)であった。

判定型にみられる各群の特徴をみると、LQ群では、 $\frac{1}{2}$ 以上の者がD typeを示し他は残る4型にほぼ均等に分散するが他群よりもA typeの出現が低いこと; MQ群では他群に比べてC typeの出現が少ないこと; HQ群は他群よりもA・C両 typeの出現が高

(表4) LQ・MQ・HQのY-G判定型分類

群 \ 型	A	B	C	D	E	計
LQ	7	9	7	20	10	53
MQ	11	11	1	13	9	45
HQ	15	9	9	9	5	47
計	33	29	17	42	24	145

く D・E が低い、などが目立つ。

ただし LQ から HQ にかけての A type の増加は、Y-G の採点形式と無関係ではない、いうまでもなく Y-G においては、“?”反応に正規の $\frac{1}{2}$ の得点を付するため、“?”反応数の増加によって全体のプロフィールは限りなく A type の特徴を帯びることとなる。このことから、HQ 群で A type の比率が高まるのは半ば当然であり、同時に彼らのプロフィールは、“?”をほとんど含まずに描かれた A type のプロフィールと比較して、その診断的妥当性が低いことに留意しなければならない。

一方 D type は、A と逆に“?”反応の少ない群ほどその比率が高まる (HQ 19%・MQ 29%・LQ 38%) 唯一の type であり、“?”反応傾向との負の相関関係は、この型が被検者の social desirability に基づく反応の構えと結びつき易いことから見て、必ずしも偶然とは思われない。“?”反応傾向と social desirability との関連については、さらに今後の検討を必要としよう。なお、3 群間の判定型について χ^2 検定を試みたが、群間差を認めることはできなかった ($\chi^2 = 14.849$, $df = 8$, $p < 0.10$)。

質問項目の曖昧さの検討：さきに触れたごとく、“?”反応は項目自体の属性による曖昧さからも齎されるが、“?”反応傾向を個人の性格特性との関連から検討しようとする際には、この種の“?”は結果を歪める artifact となるために除外されなければならない。

項目の曖昧さの概念と規準は、岩脇(1973)の指摘するごとくそれ自体多義的であるが、ここではさし当りその測度として、前出の Edwards & Walsh が挙げた“?”反応率を用い、全項目(120)中から上位10位までを選んでみた(表5)。このうち上位8項目は、

(表5) “?”反応多発項目(10位まで)

項目 番号(尺度)	項 目 内 容	LQ	MQ	HQ	計
77 (G)	いきいきしている	8 (15.1)	23 (51.1)	25 (53.2)	56 (38.6)
26 (A)	会やグループの為に働くのがたのしみである	7 (13.2)	16 (35.6)	29 (61.7)	52 (35.9)
115 (Co)	人は私を十分認めてくれない	5 (9.3)	17 (37.8)	24 (51.1)	46 (31.7)
18 (Ag)	正しいと思うことは人にかまわず実行する	8 (15.1)	10 (22.2)	26 (55.3)	44 (30.3)
14 (A)	会などの時は人の先に立って働く	5 (9.3)	13 (28.9)	21 (44.7)	39 (26.9)
86 (A)	人のあつかがうまい	7 (13.2)	10 (22.2)	21 (44.7)	38 (26.2)
22 (I)	なかなか決心がつかず機会を失うことが多い	3 (5.7)	14 (31.1)	20 (42.6)	37 (25.5)
113 (G)	動作はきびきびしている	1 (1.9)	13 (28.9)	22 (46.8)	36 (24.8)
65 (G)	仕事は人よりずっと速い方である	7 (13.2)	13 (28.9)	15 (31.9)	35 (24.1)
54 (Ag)	失礼なことをされるとだまっていらない	4 (7.5)	12 (26.7)	17 (36.2)	33 (22.8)
111 (T)	深く物事を考える傾向がある	3 (5.7)	9 (20.0)	21 (44.7)	33 (22.8)

(カッコ内の数値は反応率を示す)

少なくとも4人に1人以上の者によって“?”反応がなされたことになる。またそれぞれの項目の該当尺度では、G(活動性)・A(支配性)両尺度(ともに3項目)が目立っている。

しかしここで留意すべきことは、“?”反応に着目して項目自体の曖昧さを計る場合の測度は、集団内から得られた単なる“?”反応率のみではなお不十分なことである。

すなわち、仮りに“?”反応の選択が、(本研究で仮想することく)個人の性格特性に負うところが大きいときには(ここには、前出の Couch & Keniston の“yeasayer”と“naysayer”に倣って“?-sayer”が想定される)、集団全体での高い“?”反応率は、主として項目自体の曖昧さよりむしろ自らの所謂“?-sayer”的人格徴候に基づいて“?”を多発しがちな特定集団の、独特な“?”反応傾向によって齎された可能性があるからである。

従って、“?”反応から項目の曖昧さを吟味する場合は、“?”反応率の全般的高さのほかに、さらに“?”反応の本来的水準を異にする各下位群(ここでは LQ・MQ・HQ)においても、それぞれの平均的“?”反応率(3.9%・14.1%・28.9%)を明らかに上回るという条件が付加されなければならない。(表5)の各項目は、ほとんどがこの2条件を満足させる点で所謂曖昧項目とみなし得るものであり、“?”反応傾向と個人特性の関連を問う場合には、個人特性と係わりの低いこれらの項目の影響は除外されるべきであろう。

(表6) “?”反応の少ない項目(10位まで)

項目 番号(尺度)	項 目 内 容	LQ	MQ	HQ	計
15 (T)	一人きりでいたいと思うことが時々ある。	0 (0.0)	3 (6.7)	3 (6.4)	6 (4.1)
4 (R)	色々ちがう仕事かしてみたい。	0 (0.0)	2 (4.2)	6 (12.8)	8 (5.5)
13 (S)	知らぬ人と話すときはかたくなる	1 (1.9)	3 (6.7)	5 (10.6)	9 (6.2)
68 (O)	たびたびねづかれないで困ることがある。	1 (1.9)	1 (2.2)	7 (14.9)	9 (6.2)
23 (C)	興奮するとすぐ涙が出る。	2 (3.8)	3 (6.7)	5 (10.6)	10 (6.9)
71 (C)	時々気が散って考えがまとまらない。	1 (1.9)	2 (4.4)	7 (14.9)	10 (6.9)
1 (S)	色々な人と知り合いになるのが楽しみである。	2 (3.8)	4 (8.9)	5 (10.6)	11 (7.6)
80 (O)	時々誰かに打ち明け話がしたい。	1 (1.9)	3 (6.7)	7 (14.9)	11 (7.6)
90 (Ag)	軽蔑されたと思うとひどく腹が立つ	1 (1.9)	2 (4.4)	8 (17.0)	11 (7.6)
12 (D)	時々何に対しても興味がなくなる	2 (3.8)	4 (8.9)	7 (14.9)	13 (9.0)
30 (Ag)	目上の人とも遠慮なく議論することがある	2 (3.8)	4 (8.9)	7 (14.9)	13 (9.0)
92 (O)	時々ぼかんとしていることがある。	3 (5.7)	3 (6.7)	7 (14.9)	13 (9.0)

(カッコ内の数値は反応率を示す)

質問項目自体の曖昧さの吟味条件は、明確さの吟味条件にもなる。すなわち、明確さの規準は、集団の一般的“?”反応率が低く、かつ“?”反応傾向を異にする各下位群においても、それぞれの平均的“?”反応率を明らかに下回ることがその規準とされよう。(表6)は、集団の全成員より得られた“?”反応率の最も低いものから10位までを選んだものである。これらでは、“?”を選ぶ者が10人中1人にも満たず、しかも“?”反応率の低さがLQ・MQ・HQ各群に共通した特徴となっていることから、それらの項目は、“?”反応傾向を個人の性格特徴と交絡させて検討する際には、上記の曖昧項目と同様に、個人特性が反映していないという理由によって分析資料から除去されるべきかもしれない。

一方、被検者の“?”反応傾向を投影し易い項目を選別するときには、集団の一般的“?”反応率の水準よりも、反応傾向の程度を異にするいずれかの下位群での、項目別“?”反応率と当該群の平均的反応率との格差(discrepancy)が、より重要な指標とされよう。

要 約

Questionnaire に対する反応の構え(response set)の1つとして、“?”反応傾向(cannot say tendency)を想定し、いわゆる“?”反応多発者(?-sayer)の性格特性の解明に必要な基本資料を得るため、さしあたりY-G性格検査における“?”反応の出現状況を、検査自体から抽出された判定結果と交絡させながら分析した。

対象(道内医大2学年学生145人)から得られた結果の主要なものは、①全項目(120)での平均“?”総数は18.2であり、従来の報告例を大巾に上回っていた;②“?”反応の選択には著しい個人差がみられ、個人別の“?”総数は0(8人・約6%)から65にまでわたる;③“?”総数の多い群のY-GプロフィールにはA type, 稀少群ではD typeが目立つほか、とくにD typeでは“?”反応傾向との間で負の相関がうかがわれた;④特定項目での“?”反応の出現の特徴を通して、項目自体の曖昧さの指標に関する1, 2の知見が得られた。

文 献

- Berdie, R. F. Likes, dislikes, and vocational interests. *J. appl. Psychol.*, 1943, 27, 180-189.
- Couch, A. & Keniston, K. Yeasayer and naysayers: Agreeing response set as a personality variable. *J. abn. soc. Psychol.*, 1960, 60, 151-174.
- Edwards, A. L. & Walsh, J. A. Relationships between various psychometric properties of Personality items. *Educ. psychol. Measmt.*, 1963, 23, 227-238.
- Edwards, A. L. & Walsh, J. A. A factor analysis of ? scores. *J. abn. soc. Psychol.*, 1964, 69, 558-563.
- Eysenck, H. J. Response set, authoritarianism and personality questionnaires. *Brit. J. soc. clin. Psychol.*, 1964, 1, 20-40.

Graham, J. R. *The MMPI: A Practical Guide*. Oxford University Press. 1977.

岩脇 三郎 心理検査における反応の心理 日本文化科学社, 1973.

Jackson, D. N. & Messick, S. J. Content and style in personality assesment. *Psychol. Bull.*, 1958. 55, 243-252.

辻岡 美延 新性格検査法 竹井機器工業株式会社, 1972.

続 有恒 質問調査法 同学社, 1954.

(旭川医科大学 心理学)